

Topics

千葉県美術館開館20周年記念 歴代館長が選ぶ 所蔵名品展

開館20周年記念記念展 ドラッカー・コレクション 珠玉の水墨画

「マネジメントの父」が愛した日本の美



柴庵《柳燕・鵲鵲図》室町時代 ドラッカー・コレクション

館長のつれづれだより ～開館 20 周年の年を迎えて～



千葉市美術館は、本年11月3日で、お蔭様をもちまして開館20年を迎えます。

この間、皆様からは、多くのご支援やご協力、またご教示を賜りましたこと、ここに改めて厚くお礼申し上げます。20年の歴史を振り返ってみますと、その道は決して平坦ではなく、大学院を出て差ほど経たない若い学芸員たちがあつまって、暗中模索、苦闘苦戦するなかで、こんにちの高い評価を得るに足る特色のある、また他に追隨を許さない独自性豊かな企画や展示を展開することの出来る美術館へと、成長したものと些か自負するところがあります。と申しますのは、わたし自身は、館長に着任してようやく3年を過ぎたところであって、すでにそれぞれの経験を経て安定した力をもつ職員たち、なかんずく学芸員とともに職務に専心することが出来たわけであり、それ故に、いわば第三者的立場からの評価を与えることも可能であるかとの考えからです。

先日、当館の開館20周年を記念する事業の一つとして開催する「歴代館長が選ぶ館蔵名品展」にともなう図録『千葉市美術館所蔵名品100選』に掲載するための、歴代館長による鼎談が行われましたが、その際、初代の辻惟雄館長、二代目の小林忠館長が異口同音に語るの、手を替え、品を替えいろいろと展覧会を企画しても、最初の10年ほどは、全く人が入らなかったと慨嘆されること頻りでした。しかし、ここ5～6年以前、すなわち小林館長在任中の最後の2～3年頃から、漸く、年間の入場者が15万人に達するようになりました。この数字は、東京都内にある国・公立の大博物館や大美術館を除くと、立地条件も良く、また人にもその名もよく知られている都内の有力私立美術館での年間入場者目標値に匹敵します。地方の、と言っては如何かとも思いますが、しかし、むしろ例外はあるでしょうが―入場者の多いことで知られる、ある地方の公立美術館では、無料で通り返けの出来るスペースを通過し、展示を見ない人も美術館の入場者にカウントしているという噂さえ聞えるのですが―当館の入場者数は、全国平均から見ても相当に高い数値を示すものといえましょう。

わたしたちは、それに安住し、努力を怠ることは決してありません。いま達成したアベレージを保ち、というよりはむしろそれを少しずつ上げながら、同時に継続性のある質の高い美術館事業を展開すること、とりわけご来場下さる多くの方々の関心を喚起するような魅力のある美術展示を行うことでしょう。それには、コレクションの充実を図ることも大事です。歴代館長鼎談でも、そのことは再三にわたって指摘されています。豊富な収蔵品は、独自性の高い多様な展覧会の企画を促し、それを可能にするからです。

しかし、それにも増して人材の育成が、それも自らの手によって人を育てることが重要だと考えています。これを教育・研究機関における人材の自己再生産とわたしは呼びます。実は、このわたしにとっては、いわば悲願といえる、新規職員の採用が、千葉市の理解によって今春漸く実現したのです。

新規採用のこの二人の学芸員を現況の学芸スタッフたちが意を傾注し、これから養成して行くわけですが、「もも、くり三年、柿八年、枇杷は九年でなりかねる。梨の馬鹿めは十八年」または「梨はゆるゆる十三年」、あるいは「ゆずの馬鹿やろう十八年」といった喩えにあるように、どんな樹やものにも、育ち、実を結ぶには一様ではなくそれに相応しい年数が必要なのです。梨や枇杷は、千葉県の代表的な濃産物です。終戦後の一時期―小学校入学から4年生まで―わたしは、千葉県市川市の祖父母の家で過ごしましたが、そんなある日、近在の梨生産農家の人が「奥さん、漸く売れる梨が出来ました」と、相当な苦勞のあとが窺がえる満面の笑みで、祖母に取れた梨を届けに来たことをはっきりと記憶しています。学芸員を枇杷や梨に例えて良いかどうかは躊躇するところではありますが、現在の当館のようにそれぞれが力を備えた一人前の学芸員となるのにはやはり時間がかかるのです。そのことは、上述した開館以来の来館者数の推移や現在に至るバラエティーに富む展示内容の軌跡をみても、容易に理解出来るでしょう。

「美術館は都市の器官である」。美術館の健全で力強く生き生きとした活動が、身体である都市そのものを豊かに発展させる。これはアメリカの美術館関係者がよく口にする言葉です。美術館は市民とともにあります。

若い学芸員を迎え、わたしたち千葉市美術館に働く職員は、5年先、10年先、20年先をしっかと見据え、市民の期待に応える得る美術館として成長して行く努力を続けます。何卒、変わらぬご支援をお願いします。2015年度は、開館20周年を記念する魅力に溢れる展覧会の数々を企画し展開します。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

〔館長 河合正朝〕



加藤栄三《栗図》



遠藤健郎《枇杷と鱈》1945～90年



1995年11月3日に開館し、今年20周年をむかえる千葉市美術館。「千葉市美術館開館20周年記念 歴代館長が選ぶ 所蔵名品展」の開催にあたり、当館館長の河合正朝と、本展担当学芸員の藁科英也が対談しました。美術館のコレクションのこと、これからの美術館のこと…どんなお話が聞けるのでしょうか。

美術館のコレクションとは

藁科：「千葉市美術館開館20周年記念 歴代館長が選ぶ 所蔵名品展」を開催するにあたり、初代館長・辻惟雄先生、二代館長・小林忠先生、そして河合館長に大まかな作品の選出をお願いしたわけですが、三人の好みの違いというのは出ましたでしょうか？

河合：いや、出てないんじゃないかと思うけどね(笑)。思ったほどには出てないという感じがありますよね。でも限られた三本柱のコレクションというのがあるわけだけから、その中の範囲だからやっぱりだいたい近いものが出ますよね。たとえばあらゆる時代のものからということになると違うけど、持ち駒が一緒なんだから。選べばやっぱり造形的な問題として捉えると、やっぱり質が高いものということになりますよ。

藁科：近世絵画中心になるとそうなりますよね。

河合：だからもっと現代の美術まで広げると随分変わっていくんだけど、やっぱり三人の限界でね、現代美術までカバーできなくて。実際に100点選ぶっていう段階では、辻さんも小林さんも僕もそれなりに実物を見ながらもう一回考えてみるとあれもいいこれもいい、そういうことになっていくんですよ。

結局浮世絵が多くなっちゃうし、江戸時代のものが少なくなってしまうよね。

僕なんか浮世絵が嫌いだっていっても、この中で選ばれるのはやはり浮世絵が多くなるのは、与えられた牌が一緒だからね。

藁科：意外に思ったんですけど、歌麿の肉筆《納涼美人図》などはすぐに皆さん挙げてないんですよ。(註1)



喜多川歌麿
《納涼美人図》
寛政6-7年(1794-95)頃

千葉市美術館開館20周年記念 歴代館長が選ぶ

所蔵名品展

対談 館長・河合正朝×担当学芸員・藁科英也

河合：まあ納涼美人図がすごくいいものだし、写楽とかも挙げてもいいんだけど、あまり誰でも言いそうなものを我々は選ばなかったりするんじゃないの(笑)。そこまでプロじゃないから分からないけど、北斎の《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》とかは選んでないよね。



葛飾北斎
《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》
天保2-4年(1831-33)頃

藁科：辻先生は選んでいますよ。

河合：辻さんはまともなんだな。ああ、小林さんも選んでましたね。

藁科：コレクションとして、昨年の鼎談(『千葉市美術館 所蔵作品100選』所収)のときにも海外の美術館との比較が出ましたが、客観的にみて当館のコレクションと海外の日本美術のコレクションを比較していかがですか？

河合：海外のコレクションの場合、大きな美術館というものはエンサイクロペディック(encyclopedia)という、とにかく古い時代から新しい時代までのものを全部集めるというやり方で、千葉市美術館の場合はそういう集め方をしていないところに良さがあるから、一概に比較できないよね。アメリカでもシカゴ美術館なんかは浮世絵はすごくいいけど、それ以外のものと比較したら質的には千葉市美術館の方がレベルが高いですよ。

藁科：それはやっぱり地の利を生かしてということですかね。

河合：メトロポリタン美術館だって、つい30年くらい前までパッカード・コレクション(註2)が入るまでは大したことなかったんですよ。有名品は何点かあったけど。パッカードのものが入って、その後バークさん(註3)が艇入れして、それで今は日本美術に関してもアメリカの美術館で日本美術の代表する大コレクションというとボストン美術館とフリーア美術館くらいですよ。じゃあ日本ではどうかというと、出光美術館とか根津美術館とかにはとても敵わないけども、公立の美術館で江戸、近世以後である程度レベルの揃ったコレクションを持っている美術館って、そうないからね。一点豪華主義は簡単にできるけど、平均的にコレクションのレベルを上げるってことは結構難しいんですよ。

藁科：日本の美術館では、学芸員の世代がようやく三世目くらいじゃないですか？美術館が増えだしたっていうのは、1970年代の後半からですよ。

河合：40年も経ってないんだよね、結局。

藁科：その中で20年よくやってきた方なんでしょうね。

河合：山梨県立美術館にはミレーがあったり、他の美術館でも結構ルノアールくらいは持ってるじゃない。パブルのときに泰西名画がたくさん入ってきたわけですね。それが、パブルがはじけた段階で、銀行の担保にしていた作品がみんな外に出ていっちゃったんだよね。そういう時の文化政策として、銀行の持ってる担保の美術作品を全部国が買い取るっていうかたちで銀行に援助すれば、作品も流出を防げたと思うんだよね。歴史は知らないけど、ルーブル美術館にしてもメトロポリタン美術館にしてもそれぞれ国力があるときに集まってきたものを、国力が衰えたときに外に出さなかったっていうのがやっぱり欧米の美術館のすごい文化だと思いますよね。



担当学芸員 藁科英也

藁科：それで、今回所蔵作品だけで展示を行うというのははじめてですよ。本来は常設フロアがあって常にやらなくてはいけないことではあるのですが。他の美術館でも、企画展展示室は混んでいるのに、常設展示室はシーンとしている(笑い)。

河合：それが一つの問題でね。結局いまの美術館の現状とかデータを見ると、日本の国立美術館が世界の美術館の中でも入場者数が4、5位だということになっているけれども、あれは特別展の方で入場者数が増えているわけで、メトロポリタン美術館にしても、ボストン美術館にしても、大英博物館にしても、常設展で人が入るんだよね。その問題には気がついていて、国内でも常設展に力を入れようという方向になっているわけだけど、もしかしたら日本人の習性なのか、出開帳に弱いんだよね(笑い)。常にあるものを見せてもらっているんじゃないく、やっぱり外国からきたとか国宝が集まったとか、そういうことで初めて美術館に行こうという。そういう意味では美術館活用の後進国ではあるんだよね。

藁科：今回3人の歴代館長に選んでいただいた中で、所蔵作品を公開するわけですが、館長としてはどういったところを見ていただきたいというのはありますか。

河合：こういう考え方は基本だと思うけど、本来は「この美術館にどんなものがあるって…」ということをできれば多くの方に知っていてほしい。千葉に行けばこの作品が見られるんだとかたかが理想なのだけど、ルーブル美術館に行けばモナ・リザが見られるとかね。ところが常設展ができない美術館というのはこれが見たい！といってもほぼ見られない。東洋美術、とくに日本美術の場合は材質が脆

弱だから常に出しておくことには耐えられないわけだね。だけど昔僕がアメリカに行った頃なんかは、かならずボストン美術館では《平治物語絵巻》と《吉備大臣入唐絵巻》が出ていたんですよ。出しっぱなし。そのかわりすぐく傷んでいたけど。いまは日本の研究者などが、常に展示しているのは保存に良くないと言っているので、ボストン美術館とかに行っても見たいものは全然見られないけど。それでも、美術品はみなさんのものですという考えがあるから、日本のように特別閲覧が難しくないわけ。誰でも見せてくれる。よっぽど「こいつおかしいやつだ」ということがないかぎりは(笑い)、一般市民にも見せてくれるんですよ。ただシステムが違うから、千葉で市民の方から「鈴木其一の芒野図屏風見せてよ」と言われても、保存の問題はとにかくとして、人がいないから対応ができない。そういう要望に学芸員がいちいち応えていたら仕事ができなくなっちゃうわけですよ。アメリカの場合はハンドラーという職があって、作品の入出庫をちゃんとやって、作品を見せているときにはちゃんとその場に立ち会う。この人には見せても大丈夫というのは学芸員が判断して、見せるのはそのハンドラーがやるから成り立っているけれど、日本でそれやったらとてもじゃないけど対応しきれない。



鈴木其一《芒野屏風》
天保(1830-44)後期

藁科：(国外の美術館は)職員が100人単位でいるわけですからね。

河合：所蔵作品展というのは、常設展がある美術館は別として、他の美術館で所蔵品、新収蔵作品や寄贈・寄託作品をちゃんと定期的に見せていたりするじゃないですか。寄贈・寄託者が「寄贈・寄託したんだけど展示もしてくれない」というような不満がすごいあるわけね。そういうところをここはちゃんと対応していると思うし、今後やっぱり続けていかないと。千葉市美術館では今のところ、収集の中では寄贈と寄託が頼りだからね。

藁科：常設の話でいえば、これは今回図面をひいてて思ったんですけど、日本のその伝統の作品ですね、展示するときにその季節感とちぐはぐなものを並べていいんだろかという悩みがあるわけですね。常設であれば、そこは考えなくちゃいけないんじゃないかと。

河合：観覧者としてはそれが分かりやすいかもしれないね。「なぜこの作品が出ているんですか？」といった場合に。でもこれもどんどん失われて行くかもしれないよね。だって一年中みかんが食べられたりしているわけだから(笑い)。

藁科：でも逆にそういうものを守っていかないと、研究者も微妙なニュアンスと言うものが分からなくなっていくんですよ。

河合：これは美術に限らずそうだけど、「白木屋(日本橋)が～」なんて

言ったってまったく分かんないわけ。だけど明治・大正の文学の中に出てくるんですよ。

藁科：白木屋といたら「ああ、あの横町の」みたいな。

河合：そうそう。その街のイメージが湧いてくるような、ランドマークというのが、今はどんどんなくなってしまっているわけ。

藁科：ランドマークがなくなっている分だけ、その季節感みたいなものが最後の抛り所のような感じになっていると思うんですよ。

河合：だんだん日本でも季節感と言うものは失われてきているよね。

藁科：そういうところを加味しながら、鑑賞してもらいたいなとは思ってますけど。

河合：それはある意味では迎合するんじゃないくて、むしろそういう主張が美術館にあってもいいよね。この作品はこういうバックグラウンドがあるから生まれたんですよっていう。バックグラウンドを理解した上で見るともっと楽しみ方が広がるという。僕なんかはわりと千葉市美術館の1階に旧川崎銀行の建物があるというのが意外に重要だと思っているんですね。それがひとつのランドマークというか。

藁科：それから、鑑賞する方にも自分の好みの作品を見つけてもらいたいな、と思いますね。

河合：そう。それ、前にもニュースに書いたよね(註)。「これ好きだな」と思うものが重なっていくと、自分の好みのものが見えてくるというか、気付くんだよね。こうやってみると楽しみが増えるという風になるので。

藁科：だから自分が美術が好きだと思っても、踊らされていて(笑い)企画展ばかり見るのではなく、所蔵作品も見てほしいと。

河合：それは欧米でも同じで、やっぱりゴッホのあの作品が、となると長蛇の列ができてしまうし。人間の心理ってそう違うものじゃないんだけど。

今後の展望について

藁科：今後、次の20年に向けていかがでしょうか。

河合：次の20年ね。つねに今と同じようにその時代にあうようなそのスピード感と歩幅で進めていくと。そのためには内部で知的再生産ができるような環境を維持していかなきゃならない。そのためには新しい学芸員なり職員を入れていかなければならない。

藁科：知的再生産とエスタブリッシュを取り違えている場合が多いような気がしますね。

河合：この美術館は人員的な問題でしょうがないことかもしれないけど、いまの限られたキャパシティのなかでそれなりに考えてるんじゃないの。北斎と写楽はやってないぞ、という。

藁科：収集の方はかなり難しいでしょうけど、こことここが欠けてるっていう…

河合：いまから20年前に収集したものっていうのはある種の美術館の主張だったわけじゃない？その主張というひとつの考えが継承されれば、次の人たちがこの視点で作品を集めていくんだ、ということになればある種の知的再生産なり継承ということになるんじゃないの。

註：美術館ニュースC' n72号



館長 河合正朝

藁科：別の角度で補填していくと言うことですよ。

河合：エンサイクロペディアだったら、ずっと補填していかなきゃいけないけどさ。そのかわり、違う視点で、利用するというなかで伝統性をいかしていくということですよ。そのコレクションをどう利用するか。

藁科：不遜に聞こえるかもしれませんが、たぶんうちの美術館が、戦後美術をどんな文脈でも語れるような形でかろうじて収集できた最後の美術館かもしれないですね。ミュージアムピースという前提があつてのことですけれども。

公立美術館ですから、他館で収集してれば安心と言うところはありませんが。

ニュースをお読みになっている方へ

河合：美術館に来てください、としか(笑い)。美術館は敷居の高いものではなく、私たちは皆さんと同じ目線で考えています、と。まずは一度おいでいただきたいですね。

藁科：ただば一つと見て歩くだけでもいいんですよ。

河合：それで好きなものが見つかれば、一番ですね。

註1:「千葉市美術館 所蔵作品100選」所収の歴代館長によるアンケート「私が選ぶ千葉市美術館コレクション」
註2:ハリー・G.C.バックカード氏のコレクション
註3:メアリー・アンド・ジャクソン・パーク財団のコレクション。

関連イベント

■記念シンポジウム「歴代館長よもやま話」
4月25日(土) 14:00より(13:30開場) 聴講無料
会場:千葉市民会館大ホール(JR千葉駅東口より徒歩7分)
司会:河野元昭(京都美術工芸大学学長)
パネラー:辻 惟雄(MIHO MUSEUM館長・初代当館館長)／小林 忠(岡田美術館館長・二代当館館長)／河合正朝(現当館館長)
＊このイベントは終了しています。
＊＊当日ご参加の皆様にお配りした記念品引換券は展覧会会期中、美術館にて記念品とお引換いたします

千葉市美術館開館20周年記念 歴代館長が選ぶ 所蔵名品展

第1部：2015年4月10日(金)▷5月10日(日)
第2部：2015年5月19日(火)▷6月28日(日)
〔休館日〕 4月27日(月)、6月1日(月)
〔観覧料〕 一般200円(160円) 大学生150円(120円)
※()内は団体30名以上
※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※第2部は同時開催「ドラッカー・コレクション 珠玉の水墨画」入場者は無料

ドロッカー・コレクション 珠玉の水墨画

「マネジメントの父」が愛した日本の美

Masterpieces from the Sansō Collection: Japanese Paintings collected by Peter F. and Doris Drucker

経営学の泰斗にして、「マネジメントの父」とも呼ばれる、ピーター・F・ドロッカー(1909～2005)。世界の企業人に多大な影響を与えただけでなく、その幅広い専門領域と未来への洞察によって、没後10年となる今再び新しい関心が高まっています。著書を出すごとにベストセラーとなり、翻訳書の出版は49カ国に及びますが、ドロッカー自身も、「人口を鑑みれば日本ではアメリカの2.5倍売れている」と言っていたように、日本が最大の読者を持ち、特に影響が大きく深かったといえます。世代によっては、ドロッカー本を小脇に抱えていなければ格好がつかなかったという時代も思い出されるそうですし、セミナーに参加した、すぐるように読んだ、というビジネスパーソンの熱烈な話もよく聞きます。近年、岩崎夏海著『もし高校野球のマネージャーがドロッカーの「マネジメント」を読んだら』(ダイヤモンド社、2010年)がベストセラーとなり、「もしドラ」ブームによって、さらに幅広い層へその名が広がったことも記憶に新しいところです。ドロッカー本がエンターテインメントになる面白さも持つことに着目し実際に成功したのは世界にも例のない現象でした。以来、「もし〇〇が××したら」という語りがドロッカー本の読みはもとより、硬軟、分野を問わず、どれほど増えたことでしょう。

一方、そのドロッカーが、日本の古美術に深い愛情と関心を寄せ、水墨画に優れたコレクションを築いていたことを、どのくらいの方がご存知でしょうか。自身により「山荘コレクション」と名を付けられたそのコレクションは、稀少な室町時代の水墨画を主とする点、大変珍しく個性的なものです。日本では一度、1986年に「ドロッカー・コレクション水墨画名作展」が開催され、東京・大阪など4会場を巡回しています。約30年前のことです。「ドロッカー・コレクション」のドロッカーとはあの(、)ドロッカーだったのか、というような認識が、私自身も含め以後の美術のファンには多かったと予想します。

この両極を結びつけたい、というのが今回の展覧会なのです。

ドロッカー・コレクションには、室町水墨画のほかにも、桃山時代の武人画家海北友松や、江戸時代の池大雅や浦上玉堂などの文人画、白隠などの禅画、一部には伊藤若冲や長澤蘆雪、琳派の作品も含まれています。これらは、1959年の初来日の時から1980年代にかけての収集になるもので、マネジメントに関するコンセプトのほとんどを生み出すという功績を築き上げる傍らのことでした。なぜ日本美術だったのか、ドロッカーにとって、日本美術を見るということ、そしてそのコレクションはどのような意味があったのでしょうか。

ドロッカーの日本美術との出会いは第二次大戦前のロンドンにありました。ウィーンに生まれ、ナチスの台頭によりドイツを脱出した若き銀行員であった20代のドロッカー。雨宿りのため偶然迷い込んだ日本美術展を見て“Hooked”、つかまってしまったのだと、何度も語っています。結婚してその後アメリカに移住し、日米開戦直後のワシントン勤務では、昼休みにフリアギャラリーに通い、数々の作品を蔵から出してもらって見ては「引き裂かれた狂気の世界」へ戻る英気を養ったのだといえます。そのようにして日本美術への興味も研ぎ澄まされ、好みの分野も自覚し、日本でのセミナーを二つ返事で引き受けて初めて来日したのが1959年。このとき京都で2点の作品を初めて購入しました。これがコレクションの始まりでした。

如水宗淵《柳堤山水図》(図1)は、次いで1962年に、東京の瀬津雅陶堂から購入した作品の一つです。

この一流の古美術商を初めて訪ねたとき、「室町水墨の山水画の良いものを見たいのですが・・・」と切り出し驚かれたといえます。以後主人の瀬津伊之助は、ドロッカーのよき「先生」の一人となりました。如水宗淵といえば、雪舟の弟子で、あの《破墨山水図》(国宝)を師から印可の意味で与えられたその人です。霧に煙る湿潤な、詩情溢れる自然を描いたこの小さな掛軸を得られたとき、どれほど感激

したことだろうと想像します。ドロッカーの目を追従することによってこの絵の意味も新たに沁み出てくる気がします。また、美術を通じた「先生」たちの言葉は、自らの教育観をも培い、仕事上与える助言にも響いていたに違いありません。

その後ほぼ毎年のように仕事で来日し、日本で得た収入は日本で使ったという話があるようにコレクションも増えていきました。室町水墨画では、雪村《月夜独釣図》(図2)をはじめとして著名な作品も1960年代の早い段階で入手しています。ドロッカー・コレクシ



(図2)
雪村《月夜独釣図》
室町時代



(図1)如水宗淵《柳堤山水図》 室町時代



(図3)知有《翡翠図》室町時代



(図4)精庵《雪中雀図》室町時代



(図5)
仙厓《白衣観音図》江戸時代



(図6)
田能村竹田《涼月談心図》
江戸時代



(図7)
海北友松
《翎毛図》六幅のうち
桃山時代

ョンには、他には作例がほとんど見いだせない、つまりここでしかその人の作品を見ることができないという、逸名の室町水墨画家の作品が何点も含まれます。例えば知有《翡翠図》(図3)や精庵《雪中雀図》(図4)など、捺された印章にその名が刻まれているものの、伝記の詳細はほとんど伝わりません。薄暗いような画面は今どきの目にはとっつきにくいかもしれませんが、しかし何か生命感をみなぎらせ、忘れがたい存在感を放っています。ドロッカー・コレクションはこうした作品群によって記憶されているのです。

三度目の来日の折りには、何の予備知識もなく店頭で禅画に出会い、衝撃を受けました。禅画については、20世紀初頭のヨーロッパの表現派が目指していたものをそこにみて接近しやすかったと言っています。風外慧薫の達磨図を1968年に購入したのを最初として禅画はコレクションの一角を占めるようになりました。仙厓の《白衣観音図》(図5)のようなあまり例のない鋭さ、切れ味のある一点も記憶されます。

また、コレクションの約3分の1は、江戸時代の文人画です(図6)。文人画は他の絵画とはまったくことなった美意識と芸術とのかかわり合いをもっており、観る人にその画家の心(ペルソナ)を持って見るよう要求するように思われたといい、魅了されつつも慎重に近づいたようです。「文人画と共にいれば、それだけ自分自身について学ぶことになる。これこそが正に文人画の威力である」という言葉は、印象深いものです。

また、「日本人は動物画にかけておそらく世界一ではないかという気がする」とまで言う魅力的な水墨の鳥獣画(図7)や、神仏、歌仙、

禅宗祖師といった聖なる超越的存在と括るべきか、人物像の作品も多く含まれています。 1971年からはカリフォルニア州クレアモントに移りますが、主要な著作が著されたのは、ほとんどそののち、61歳以降のことです。“教養としての”“人間中心の”マネジメントを構築し得たのはこの地の環境でした。けして広くはない、書棚の間の壁にピンを刺し、日本の掛軸を掛けて生活の一部としていたドロッカーの書斎には、どんな風が吹いていたことでしょうか。

正氣を取り戻し、世界への視野を正すために、

私は日本画を見る--- Peter F. Drucker

初公開を含む作品111点が里帰りし、ゆかりの品々やコレクションをめぐる資料とともにご覧いただくという最初で最後の試みに、どうぞご期待ください。

〔学芸係長 松尾知子〕

関連イベント

■記念講演会
“Adventures of The Collectors' Bystander”(「コレクターの傍観者としての時代」)
【講師】Cecily Drucker セシリー・ドロッカー(ピーター&ドリス・ドロッカーの次女/弁護士)、通訳付
6月6日(土) 14:00より(13:30開場予定)／11階講堂にて／聴講無料／定員150名(※往復ハガキによる申込制／5月27日必着)

「ドロッカー・コレクションの魅力ー経営学と水墨画」
【講師】島尾新(学習院大学教授)
6月14日(日) 14:00より(13:30開場予定)／11階講堂にて／聴講無料／定員150名(※往復ハガキによる申込制／6月4日必着)

■ワークショップ
「カラダに貞(き)く まあるい世界」
開館前の展示室で、絵に囲まれつつ、体と対話。
日曜日の朝活は、体ほぐしからー
【指導】禪學佳秀(愚尚庵 庵主)
5月31日(日)／8:30より(約1時間)／展示室にて／参加無料(要別途観覧料)／定員15名程度(※往復ハガキによる申込制／5月22日必着)
※詳細はホームページにてお知らせいたします。動きやすい服装にてご参加ください。当日についての詳細は参加者にお知らせします。

※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

開館20周年記念記念展

ドロッカー・コレクション 珠玉の水墨画
「マネジメントの父」が愛した日本の美の旅ー

2015年5月19日(火)▷ 6月28日(日)

〔休館日〕 6月1日(月)

〔観覧料〕 一般 1200(1000)円、大学生 700(560)円

※()内は前売券、団体20名以上の料金

※市内在住65歳以上の方は一般料金より2割引

※障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※前売券はミュージアムショップ(5月10日まで)、ローソンチケット[Lコード：31366]、セブンイレブン[セブンチケット]および、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(6月28日まで)にて販売

7階ミュージアムショップに新商品が登場しました。喜多川歌麿『画本虫撰』をモチーフにしたトートバッグや、伊藤若冲『雷神図』がリズミカルにデザインされたマグカップなど、当館の所蔵作品を使用したグッズです。一番人気は中村芳中『光琳画譜』の可愛い仔犬をデザインした缶入り飴。お土産にぴったりですので、ぜひお立ち寄りください。



トートバッグ 900円、マグカップ 900円



かわいい琳派飴 各500円

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

2015年度上半期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

【時間】 14:00より(開場は30分前)

【場所】 11階講堂

【定員】 先着150名(入場無料)

○第1回	5月30日(土)	「逸名の室町水墨画家たち —ドラッカーさんが愛した墨絵の世界」 【講師】 河合正朝(当館館長)
○第2回	6月20日(土)	「ドラッカー・コレクションの軌跡」 【講師】 松尾知子(当館学芸係長)
○第3回	7月18日(土)	「辰野登恵子 絵画のモダニズム」 【講師】 藁科英也(当館学芸課長代理)
○第4回	8月22日(土)	「ルーシー・リーのうつわ」 【講師】 山根佳奈(当館学芸員)

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

◎千葉市美術館「友の会」会員募集中

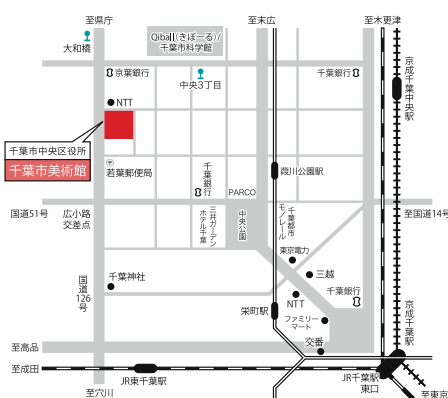
展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

【会員の特典】

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。



【開館時間】

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【交通案内】

○JR千葉駅東口より

○徒歩約15分

○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて

「中央3丁目」下車徒歩3分

○千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分

○京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

○東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く

○地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan

http://www.ccma-net.jp/

【発行日】 2015年5月18日

【印刷】 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art